

ヨハネによる福音書19章1-16節 「罪なき方の断罪」

1A 「見よ、この人だ」 1-7

1B むち打ちによる辱め 1-5

2B 「神の子」としたイエス 6-7

2A 上から来られた方 8-12

3A 「見よ、お前たちの王だ」 13-16

本文

ヨハネによる福音書 19 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ヨハネ 18 章まで来ました。ついに今日、イエス様が十字架に付けられる 19 章に入ります。今朝は前半部分、1 節から 16 節までを一節ずつ読み、午後に後半部分 17 節以降を読んでいきます。さっそく中身に、入っていきましょう。

1A 「見よ、この人だ」 1-7

1B むち打ちによる辱め 1-5

¹それでピラトは、イエスを捕らえてむちで打った。

私たちは前回、ピラトの総督官邸にイエス様が連れてこられたところを見ました。ピラトは、ユダヤ人指導者の訴えを聞き、イエス様にも尋問するも、ローマ法によって裁かれるべき理由を見つけることができませんでした。ようやく、「ユダヤ人の王」という告訴を聞き、ローマの王カイサルの他に王がいるということ、反逆罪で裁けるのか？と思いましたが、イエス様が、「18:36 わたしの国はこの世のものではありません。」と言われて、これまた、この世の政治の世界における王の話をしているのではないと分かりました。だから、彼らに「18:38 私はあの人に何の罪も認めない。」と言ったのです。

ところが、総督ピラトは、政治的に難しいかじ取りを強いられていました。ユダヤ人たちは、ものすごい反発をローマに対してしています。ローマを憎んでいました。ユダヤ人を強権で抑えつけても、反発されるばかりです。ここでユダヤ人の指導者らを上手に取り扱わないと、自分の政治生命も危うくなると恐れました。それで、明らかに罪がないことを知りながら、彼らを宥めることを決めました。本当に暴動を起こし、強盗も行っていたバラバを釈放するか、それともこの、ユダヤ人の王を釈放するか？と、彼らの選択を与えたのです。公正よりも、自分の保身を選んでしまいました。

本当に公正の中に生きるとは、難しいことです。「ミカ 6:8 主があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」

公正や誠実、あるいは憐れみは、神のみこころだと分かりながらも、人々を恐れる恐れから、自分を守るために異なる決断をしてしまう誘惑です。

そして、今ここで、ピラトは、イエス様をむちで打つようにさせました。ピラトは、政治的な妥結を願いました。懲らしめれば、その上で釈放すれば彼らを満足させることができようと思っていました。

この「むちで打つ」ということは、ここではただ一節ではありますが、神のご計画の中ではかなり大きな部分を占めています。まず、ローマによるむち打ちが何のために行われるか、またどのようなものなのかを説明します。これは、被告人の自白を強要する手段でした。パウロがエルサレムで騒動に巻き込まれた時に、ローマの千人隊長が取り調べるためにむち打ちにしようとして、パウロが、「ローマ市民である者を、裁判もかけずに、むちで打ってよいのですか。(使徒 22:25)」と言ったら、ただちにやめました。これは恐ろしいものでした。兵士が疲れるまで打ち続けます。長い皮のひもを使い、ひもの先には、ガラスの破片、羊の骨、鋭利な金属片、釘などが付けてありました。囚人の背中を水平になるように両手を鎖に付けて、その背中向けて、そのむちで打ちます。背中だけでなく、胸やわき腹、顔まで打たれます。背骨が見えたり、内臓が飛び出すこともありました。この過程で、死んでしまう者たちもいます。

この恐ろしい懲らしめを、預言者イザヤは幻の中で見ていました。「52:14 多くの者があなたを見て驚き恐れたように、その顔だけは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。」イエス様の顔はかなり損なわれていた、破損していたと思われます。

なんで、こんなことまでされるのか？預言者イザヤは、続けて、約束のメシアが、病の人で、傷を受けることを見ていました。「人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」と言っています。そしてこう言っています。「53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」十字架の上で釘に刺されることと、また、打ち傷を受けることを見ましたが、それは、「平安をもたらし」「癒される」ためであるということです。私たちの神への背きのゆえ、身代わりに打ち傷を受けられます。そして癒され、平安が与えられるのです。

ここには、二つの意味があります。罪が赦されることによって、魂に与えられる癒し、平安です。「I ペテ 2:24 キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。」心が、霊が癒されるのですが、マタイ 8 章によると、同じイザヤの預言から、肉体の癒しのことが語られています。「8:16-17 夕方になると、人々は悪霊につかれた人を、大勢みもとに連れて来た。イエスはことばをもって悪霊どもを追い出し、病気の人々をみな癒やされた。これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。「彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った。」

ですから、私たちはイエス様の受けられたむち打ちを見て、そこには自分の罪の赦しによる霊的な癒しと、また自分の体の病に対する癒しがあることを見ることができます。次に、主の晩餐にあずかる時、「これは、あなたがたのために裂かれるわたしの肉です」と言うイエス様の言葉を思う時に、この癒しを期待しましょう。

² 兵士たちは、茨で冠を編んでイエスの頭にかぶらせ、紫色の衣を着せた。³ 彼らはイエスに近寄り、「ユダヤ人の王様、万歳」と言って、顔を平手でたたいた。

ローマ兵の嘲りの的とされました。ユダヤ人の王だから、まず冠を作ろうということで、茨で冠を編んでそれを頭にかぶせました。そして王服の色である紫色の衣を着せました。そして、「ユダヤ人の王様、万歳」とふざけてひれ伏す真似をして、顔を平手で叩いています。ここでは、卑しめを受けておられます。私たちは、自分の罪により何がそがれるかという、自分の尊厳です。神のかたちに造られた者が、自分の罪によってそのかたちが損なわれています。その卑しい姿をイエス様が身代わりに受けてくださっているのです。

そして、茨が、聖書で出てくるのは、創世記です。アダムが罪を犯した後に、神は、「大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ(創世 3:18)」とあります。この呪いをイエス様は受けてくださいました。

⁴ ピラトは、再び外に出て来て彼らに言った。「さあ、あの人をおまえたちのところに連れて来る。そうすれば、私にはあの人に何の罪も見出せないことが、おまえたちに分かるだろう。」⁵ イエスは、茨の冠と紫色の衣を着けて、出て来られた。ピラトは彼らに言った。「見よ、この人だ。」

このピラトの言葉は、ラテン語で「エッケ・ホモ」と言って、有名です。エルサレムには、ピラトがここでそれを言ったとされる伝承の場所があり、そこに「エッケ・ホモ教会」があります。見るも無残なイエス様の姿だったことでしょう。しかし、この見るも無残な姿を見せて、これがローマに反逆している、あなたがたの王なのか？「見よ、この人を」と言っているのだと思います。あなたがたは、どれだけ愚かなのか？何も罪に値することをしていないではないか？と問いかけているのです。

ピラトが、「何の罪も見いだせない」と何度も言えば言うほど、神の御心がここで明らかにされているのです。「Ⅱコリ 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。」罪を知らないからこそ、私たちの罪の身代わりになることができました。これは、交換でした。キリストにある神の義が、私たちに賜物として与えられました。そして、私たちの罪が、イエス様の身の上に与えられました。イエス様が罪人とみなされ、私たちが義人とみなされるのです。罪があれば、自分の罪のために死ななければいけません。罪がないからこそ、その死によって私たちの罪を取り除くことができるのです。

2B 「神の子」としたイエス 6-7

⁶ 祭司長たちと下役たちはイエスを見ると、「十字架につけろ。十字架につけろ」と叫んだ。ピラトは彼らに言った。「おまえたちがこの人を引き取り、十字架につけよ。私にはこの人に罪を見出せない。」

ピラトは、血を見て満足させることができると考えました。しかし、流血への飢え渴きは癒えることはありませんでした。旧約聖書において、流血の罪がしばしば取り上げられます。「イザ 5:7 万軍の【主】のぶどう畑はイスラエルの家。ユダの人は、主が喜んで植えたもの。主は公正を望まれた。しかし見よ、流血。正義を望まれた。しかし見よ、悲鳴。」ピラトはここで、主の願われるように公正を願っていますが、聞こえてくるのは悲鳴であり、「十字架につけよ」という流血だけです。

これは人にある罪深さでしょう。一度、人を消し去りたい、自分の中から排除したいと思ったら、その欲望は際限がありません。相手の存在を憎みます。それが流血の罪ですが、私たち人間にはすべてある罪です。

⁷ ユダヤ人たちは彼に答えた。「私たちには律法があります。その律法によれば、この人は死に当たります。自分を神の子としたのですから。」

ここで彼らは本音を出しました。自分たちには律法があって、イエスは自分のことを神の子としたのだ、だから死刑に値するのだということです。ユダヤ人にとって、キリスト、イスラエルを支配し、諸国を支配する王は、神の御子であり、神ご自身であります。「9:6-7 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。⁷ その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。」

ヨハネによる福音書は、イエス様が神から来られた方、神の子であることをずっと強調していました。このことのゆえに、ユダヤ人指導者はイエス様を十字架に付けろと叫んだのです。これもまた、神のご計画の一部でした。神の御子が、罪の供え物となってくださったので、二千年後の、はるか遠くに生きる私たちのためにも、死ぬことができたのです。永遠の昔から生きておられる方だからこそ、私たちを初めから知っておられて、そのためにキリストが死なれるようにされました。

2A 上から来られた方 8-12

⁸ ピラトは、このことばを聞くと、ますます恐れを覚えた。⁹ そして、再び総督官邸に入り、イエスに「あなたはどこから来たのか」と言った。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。

ピラトは、恐れていました。無実の者を殺すようなことはできない、という恐れです。しかし今、「自分を神の子とした」と聞きました。ユダヤ人のように、メシアのような考えではありません、彼はローマの人間です。ローマ人は、神がかつた人、神のような人を信じていました。人であるのに、神がかつています。そこでピラトは、その神のような人間をもしや、むち打ちにしたかもしれないと知って、「ますます恐れを覚えた」ということです。

それで、今、再び総督官邸に入り、「あなたはどこから来たのか」と問うています。いったい、あなたは誰なのか？神がかつていて、単なる人間ではないのか？と尋ねていますが、イエス様は黙ったままです。真理を証しするために来たと言はピラトに話しておられました。ところが、ピラトは自分をむちで懲らしめることをしました。彼が罪へと引きずられていて、イエス様はそれに合わせる必要はないのです。私たちは、誰かが罪を犯していて、その要求に合わせる必要はありません。

そしてイザヤはこのことも預言していました、「イザ 53:7 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」

¹⁰ そこで、ピラトはイエスに言った。「私に話さないのか。私にはあなたを釈放する権威があり、十字架につける権威もあることを、知らないのか。」¹¹ イエスは答えられた。「上から与えられていなければ、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに引き渡した者に、もっと大きな罪があるのです。」

主がお答えにならないので、ピラトは自分に大きな権威と力が与えられていることを確認させました。釈放することも、十字架につけることも私が権威として与えられていると。ところが、イエス様は、明確に答えられます。ピラトが自分で権威を持っているかもしれないが、上から与えられるのでなければ、その権威はないということです。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」私たちも、何かしたの権威が与えられ、任されているなら、それは上からでなければ、与えられていないのです。

その上で、「わたしをあなたに引き渡した者に、もっと大きな罪があるのです」と言われています。ここで大事なのは、「もっと大きな罪」と言っていることです。ピラトに罪はないと言っています。彼は、公正よりも政治を、自分の保身を選び取っているのですから罪があるのです。しかし、それは、権威が与えられている中でそれを正しく用いていないことに対する罪であり、殺意をもっている引き渡した者たちの罪は、もっと重いということです。

ペテロは、教会が始まって間もなくして、足なえの男をイエス様の名で起こした後に、聞いている

ユダヤ人たちに説教しました。「使 3:13-15 アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち私たちの父祖たちの神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたはこの方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その前でこの方を拒みました。14 あなたがたは、この聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、15 いのちの君を殺したのです。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。」ペテロは包み隠すことなく、あなたがたが、いのちの君を殺したのだと罪を明らかにしています。私たちが、自分がイエス様を殺すような罪を犯したのだと悟るところから、そしてその罪から悔い改めるところから、罪の赦しと救いが来ます。

12 ピラトはイエスを釈放しようと努力したが、ユダヤ人たちは激しく叫んだ。「この人を釈放するのなら、あなたはカエサルの友ではありません。自分を王とする者はみな、カエサルに背いていません。」

ユダヤ人は、ピラトを脅しました。カエサルに背いていると訴えます。これが、ピラトが最も恐れていたことでした。皇帝に告げ口されることです。ですから、神の前で罪を犯しているのではないかという、健全な恐れがあったのに、それがかき消されて、今の政治的な恐れという問題に引き戻されてしまったのです。

3A 「見よ、お前たちの王だ」 13-16

13 ピラトは、これらのことばを聞いて、イエスを外に連れ出し、敷石、ヘブル語でガバタと呼ばれる場所で、裁判の席に着いた。

総督官邸にある、敷石が敷き詰められている中庭があり、そこがガバタと呼ばれ、裁判の席がありました。

14 その日は過越の備え日で、時はおよそ第六の時であった。ピラトはユダヤ人たちに言った。「見よ、おまえたちの王だ。」

ここの「第六の時」とは、ローマの時刻で午前 6 時だったと考えられます。「備え日」というのは、過越の祭りから始まる、七日間の種なしパンの祝いの第一目のことです。

その時に、ピラトは「見よ、おまえたちの王だ。」と言ったのです。先に、「見よ、この人を」と言って、人としてのイエス様を見てみよ、と言っていました。ここでは、「お前たちの王だ」と言ったのです。「この人」と言った時は、イエス様の人間性に注目させたかったのかもしれませんが。何の罪もなく、むち打ちでも毅然とした態度を取っておられたのでしょうか、しかし、今は、皮肉であり、「私の責任外にある」ということを強調しました。私はローマ人であり、あなたがたの王のことなど、関わりたくない。あなたがたの王なのだから、あなたがたで何とかしなさいという意味です。

¹⁵ 彼らは叫んだ。「除け、除け、十字架につけろ。」ピラトは言った。「おまえたちの王を私が十字架につけるのか。」祭司長たちは答えた。「カエサルのほかには、私たちに王はありません。」

ますます、十字架に付けろ、除け、除け、と叫んでいます。ピラトが、なぜ、おまえたちの王を十字架に私が付けるのか？と繰り返すと、「カエサルのほかには、私たちに王はありません」などとほざいています。これこそ、偽善の極致です。ユダヤ人たちがローマ皇帝を嫌っていたのですが、相当なものでした。それは偶像礼拝でもあるとまで考えていました。しかし、イエスを取り除きたいという思いがまさって、それでカエサルしか王はいないと言わしめたのです。しかし、これが、ピラトを躊躇せず、十字架に引き渡す言葉となりました。

¹⁶ ピラトは、イエスを十字架につけるため彼らに引き渡した。 彼らはイエスを引き取った。

こうやって、ユダヤ人たちは自分たちのところに、イエス様を引き取ることに成功しました。実際に引き取っているのはローマ兵ですが、先にみたように彼らがローマにイエス様を引き渡しました。

このようにして、正しい方が罪人として断罪されました。ここまで、ユダヤ人たちがイエスを殺したという言い方をしていましたが、それは一面でしかありません。ましてや、ユダヤ民族がキリストを殺したということではありません。それは反ユダヤ主義です。そうではありません。ここには、明確な神のご計画がありました。後に弟子たちが、「使 4:28 あなたの御手とご計画によって、起こるようにももって定められていたことをすべて行いました。」と言っています。

その計画とは、四つの側面があります。父なる神の見ていた十字架は、「宥めの供え物」です。「イヨハ 2:2 この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」神は、罪に対してそれを裁かなければいけない正当な怒りを持っておられます。それが、イエス様にあって、宥められました。それで宥めのささげ物と呼ばれています。神の怒りは満たされ、これ以上、罪に対する怒りは残されていないということです。

イエス様ご自身にとっては、「死に至るまでの従順」です。「ピリ 2:8 自ら低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」イエス様は、父なる神の御心にしたがって、人々の罪のために死なれたのです。

そして、私たちにとっては、イエス様が身代わりになって死なれました。これは私たちの見方です。

そしてサタンにとっては、完全な敗北です。「コロ 2:13-15 私たちのすべての背きを赦し、14 私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。15 そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリ

ストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」サタンにとって、十字架は完全な敗北であり、キリスト者はイエス様にあって、圧倒的に勝利者となっています。

このような神のご計画ががって、この不正の裁判の判決が出ました。罪がないのにそれでも有罪となる、これは、世が見るイエスの十字架の姿でしょう。私たちの周りに、そういった不正が至る所はないでしょうか？しかしそれらの不正や不条理以上に、イエス様の不条理はありません。しかし、その不条理にこそ神のご計画が、私たちを救うためのご計画がありました。